No.179
2016.9.15

岐阜の博物館

岐阜県博物館協会
Gifu Museum Association

「覚醒」と「刺激」が起き続けること ～協会創立50年にあたり～

協会創立50周年事業企画委員会　可児　光生

何気ない光景ですが、象徴的な写真だと思います。５月28日の協会創立50周年記念式典の前日、準備のために集まった加盟館のメンバーが協力して展示スペース前に横看板を取り付けようとしています。事務局に任せることのない自主的な動きと作業でした。

式典前に協力して準備を進めるスタッフ

今回の50周年事業は平成26年の秋から準備が始まりました。その後、部会ごとで、また部会を横断して20数回もの集まりが持たれました。館での多忙な業務がある中で、事業の実現にむけて取り組んでいただきました。その成果が今、形になりもしくはなろうとしています。素晴らしいことだと思います。

一方でこの間考えたことは、表向きの成果だけでなく、それに向けての加盟館メンバーが話し合いを重ねたことの意味です。初めてそこで顔を合わせた人たちも多くいました。メンバーは、自館以外のこと、協会のみなで取り組むことを真剣に考えました。そして共通の課題を見出し、それに対する方策やアイディアを出しあいました。50年前、協会が発足する頃、その熱気はほとばしるものがあったと聞きます。それには及ばないかもしれませんが、今回の準備期間の出来事は協会として大きな財産になると思います。

本務の時間を割いてまで、何のために協会の仕事をするのだと苦言を呈する方々が一部におられるのも事実です。確かにそれも一理ありますが、館に閉じこもっているだけでは限界があります。一歩踏み出して他館のメンバーと膝を突き合わせてface to faceで議論することは結果的に自館にフィードバックされ、客観視することができます。

そして、交流によって起きる刺激、そして生まれる信頼関係とネットワークはそれぞれの館活動が幅広く深まりのあるものにつながります。新たな観点を見出すヒントもたくさんあると考えます。

そんな場が「博物館協会」なのです。加盟館の共通なプラットフォームとしての「協会」の存在する意味がここにあると思います。

今回の50周年を迎えるにあたり「協会の加盟館及び館職員に「覚醒」と「刺激」が起き、相互の交流と連携が深まって全体の力が高まることをねらいとしたい。」とその方針を考えました（No.178参照）。50周年事業は打ち上げ花火のような一過性のものにしたくはありません。

質的な向上と継続性、そのためには、今築かれつつある、「刺激」と「覚醒」のネットワークをさらに強めることがやはり第一です。そして、事務局に頼るのではなく、加盟館のメンバーが自発的に、ただ無理のないよう、できることを少しずつ長期的視点で取り組む必要があります。

「のこす」「ひろめる」「たかめる」。基本的なこの三つのキーワードと理念を引き継ぎつつ、今後は県内圏域の地域的観点や幅広く横断的な手法も取り入れ、住民の暮らしやまちづくりに生かされ、地域にとっても刺激的で必要とされる博物館及び博物館協会になれるよう取り組みを進めていきたいと考えます。

平成28年度岐阜県博物館協会通常総会

期　日：平成28年5月28日（土）
場　所：みんなの森　ぎふメディアコスモス
参加者：96名（委任状含む）

本年度が、岐阜県博物館協会創立50周年を迎えることを踏まえ、若宮多門会長から挨拶がありました。

続いて新会員として、熊谷守一つけち記念館（中津川市）、多治見市モザイクタイルミュージアム（多治見市）、とうしん美濃陶芸美術館（多治見市）の３館が紹介されました。

その後、岐阜県博物館協会創立50周年記念事業の概要が、「のこす」部会、「ひろめる」部会、「たかめる」部会より、報告されました。

議事は、平成27年度事業報告と収支決算報告、平成28年度事業計画と収支予算等、６つの議案が原案のとおり、承認されました。

最後に、地域博物館等活性化支援事業による調査研究として、２件が報告されました。

岐阜県博物館協会創立50周年記念式典

参加者：48名

通常総会と同じ会場で岐阜県博物館協会創立50周年記念式典が行われました。若宮会長による式辞に続き、長年にわたり協会の活動に貢献いただいた宮崎惇氏、小野木三郎氏、古川秀昭氏、榎本徹氏の４名の方を協会の特別功労者として表彰しました。

続いて、公益財団法人日本博物館協会専務理事　半田昌之氏と岐阜県教育委員会　教育長　松川禮子氏からご祝辞（安福副教育長が代読）をいただきました。

その後、協会の活動に深きご理解をいただいているご来賓の方々を紹介させていただき、閉会しました。

岐阜県博物館協会
創立50周年記念講演会

講　　師：山田　五郎　氏（編集者・評論家）
参加人数：150名

記念式典に続き、同会場にて山田五郎氏による講演が開催されました。

山田氏は、上智大学文学部に在籍中に学芸員を目指しオーストリア・ザルツブルク大学に１年間遊学するなど、西洋美術への造詣が深く、今回の講演会では、その見識を踏まえ「博物館は誰のもの？」と題してお話しいただきました。

博物館が18世紀のヨーロッパで誕生した歴史を振り返り、市民革命を機に広く市民に公開されるようになった意義や経緯等を話されました。その中で、我々はルーブル美術館に行けば、いつでも「モナ・リザ」を見ることはできるが、日本の国宝であれば年間何日しか公開できないといった様々な制約があり、日本の博物館等が展示より保存に重点を置いてきたことを指摘されました。また、日本の博物館は県立・市立とも施設は立派だが展示内容が横並びで似ているという問題点についても言及されました。しかし他方で、岐阜県は、「岐阜県美術館がルドンに注力」、「関は刃物」、「多治見は陶磁器」、「飛騨は民家」といったように地域によって特徴や個性があることが素晴らしいと述べられました。

10年にも及ぶ改修工事のドキュメンタリーが映画化されたアムステルダム国立美術館の事例を紹介し、博物館は市民のものであり、自分たちの財産として資料や博物館を守り支えていくべきと語られました。

岐阜県博物館協会創立50周年記念特別功労者表彰

宮崎　惇　氏　　元協会顧問

昭和41年６月、個人会員として岐阜県博物館協会創立に参画して以来、学芸員部会委員、機関紙委員会委員、監事、顧問として、協会のためにご尽力いただきました。昭和43年に『岐阜県博物館要覧1968～９』を協会名義で自費出版し、平成４年に『棚橋源太郎－博物館にかけた生涯―』を岐阜県博物館友の会より発行するなど執筆活動も精力的に行われ、県博物館界の発展に大きく寄与されました。

小野木三郎　氏　　協会顧問

【岐阜県博物館協会に思うこと】

置県百年といえば、全国各県共に同時に迎えたのですが、岐阜県でもその記念事業の検討委員会が開かれていました。委員長が岐阜大学学長の今西錦司氏で、当初案は、県史刊行の資料収集を基に「歴史博物館」建設でした。

個人会員も含めて発足していた当協会に、「飛騨の地にこそ自然史系博物館の設立を！！」と以前から呼び掛けてきていた小中校の教員の身で参画していた私は、自然系の学芸員有資格者の広瀬鎮氏、宮崎惇氏と三人連れたって、今西委員長に直訴、「公害が注目される社会状況の今こそ、自然史分野を含めた総合博物館の設立こそ社会の要求！！」…その後も協会としての構想、県博の姿を提言、要望書提出と活動したものでした。県博実現後には、協会事務局も移され、県博物館界を引っ張る中枢となり早40年、協会は50年が過ぎました。本当に年月の過ぎ去った速さに驚かされるばかりです。

この度は、思わぬ特別功労者表彰をいただき、協会当初から半世紀に渡る思い出、その歴史の一コマ一コマを懐かしく思い出し、何だか50歳も若返った気分に浸っています。協会の益々のご発展を祈願しています。

古川秀昭　氏　　元協会副会長

【岐阜県博物館協会のこと】

岐阜県博物館協会創立50周年、素晴らしい歩みですね。私が岐阜県博物館協会に出席したのは、岐阜県博物館協会創立40周年を迎えるにあたって「全体の活性化」に向かって取り組んだ時でした。私は生き生きした美術館・博物館活動はいつでも地域社会と行政と博物館とが、互いに期待と楽しい緊張関係を共有し続ける姿にあると思っていました。そこで若宮会長の熱意のもと「活性化委員会」が、45周年に向かう５年間のヴィジョンを携えて主たる県内企業に岐阜県博物館協会の意義と事業計画とを伝えて、その結果六者の協賛を得て新たな岐阜県博物館協会の活動が展開されました。

今や創立50周年、どうかいくつかの新構想と併せて、地域社会と行政と各美術館・博物館スタッフとで燃えるプログラムを展開してください。

誰でも本当のところ生きている喜びの実感は、政治経済面にではなく、知的文化活動に見出します。美術館・博物館・資料館は、その場なのです。

榎本　徹　氏　　前協会副会長

【協会への一つの提案】

博物館の専門職員は、孤立しがちな職業である。しかしまた、専門職員ほど、多くの人との交流が必要な存在はない。そのためにできることはいろいろあるが、そのひとつに県の博物館協会のような組織における交流がある。これは、身近な館と、その館員との交流が図れるため、基本的な交流となる。しかし、具体的な何かがなければ、館務を休んで集まりに出ることは難しい。できれば、同じ目的の作業などに携わることが望ましい。その意味では、50周年記念事業における部会の働きは、きわめて望ましいことの一つであった。そこで、事業のうちのいくつかを、組織として残すことはできないだろうか。いくつかの事業は継続的なことを提案しており、協会にとっても、続けていく必要があるのではなかろうか。そこに積極的に参加してもらうことはいかがだろう。多くの人が、協会の事業に参加することによって、協会の発展につながれば、こんないいことはない。そして館員たちの交流にもなるであろう。

岐阜県博物館協会創立50周年事業企画委員会「のこす」・「ひろめる」・「たかめる」３部会報告

「のこす」部会平成27年度事業報告

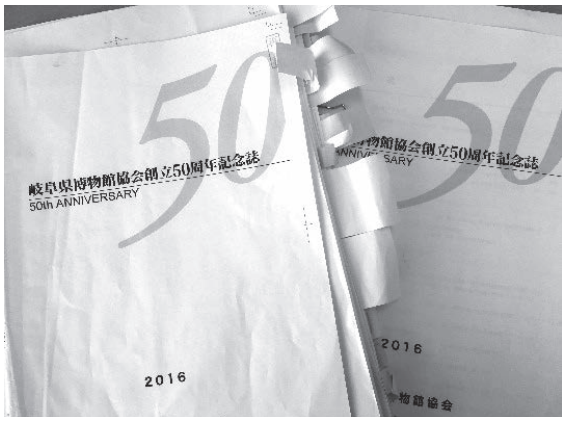
「のこす」部会　部会長　可児光生

「のこす」部会で実施したことは、協会の新たなロゴマークの作成と50周年記念誌の発刊です。ロゴマークは、どちらかというと硬くて難しい博物館のイメージを払拭しようと考えました。「ひらめき」「楽しさ」「発信」の場として親しみを感じてもらえるよう、デザイナーと何度も協議を重ねました。色は岐阜の山と川を示すミックスブルーです。

50周年記念誌は、当初の予定を超え103ページとなりました。単に協会の歴史をたどるだけでなく、その変遷の画期と特徴を捉えようとし、国の社会教育行政や様々な社会的背景などにも見地を広げ執筆しました。過去の事柄のほか、現状を把握するため、アンケートを実施。72館から得られた結果を分析し、日本博物館協会が実施しているアンケート結果と比較し岐阜県の特性も探りました。また、「これからの岐阜県の博物館」をテーマに加盟館から投稿をいただきました。

また、岐阜県出身の棚橋源太郎について巻末資料で紹介するとともに、弘前学院大学の生島美和氏に原稿を寄せていただきました。氏は７月28日に開催された東海５県の大会でも講演いただき、棚橋から今学ぶことの意義を改めて感じることができたと思います。

記念誌の発刊が、今の博物館協会や加盟館の課題解決につながり、今後の活動の何らかの役割を果たすことができれば幸いです。



校正時の原稿

「ひろめる」部会平成27年度事業報告

「ひろめる」部会　部会長　原田義久

「ひろめる」部会は多くの方々へ博物館活動を知ってもらうための事業を企画しました。

平成28年５月28日の協会50周年記念式典とあわせてぎふメディアコスモスで文化講演会を開催し、式典当日と翌日には協会紹介パネル展示及びワークショップを実施しました。文化講演会の講師には、編集者・評論家として著名な山田五郎氏をお招きし、「博物館は誰のもの？」という題名で、西洋での博物館の歴史を紹介いただき、岐阜県には様々な特徴ある博物館があると紹介いただきました。また、貴重な美術品や資料を保存し、一方では市民へ公開するという相反する使命をもつ学芸員のジレンマを説明し、博物館を利用する市民の関心が大事であると講演されました。

パネル展示では、博物館協会加盟館の紹介や博物館協会の歩み、ミュージアムレスキュー、地域連携企画事業「街道・ネットワーク」の紹介をしました。ワークショップは、岐阜市歴史博物館をはじめ、７館に協力いただき、衣装体験や小物作りなど、小さなお子様から大人まで楽しめる事業を実施しました。展示とワークショップをあわせて、約500名のみなさまに博物館を身近に感じていただくことができました。

７月16日から平成29年８月31日までの期間、ミュージアムスタンプラリーを実施しています。スタンプラリーは、ふだん訪れる機会のあまりない博物館などをまわるきっかけ作りで開催しています。スタンプを10個集めると、各地区の拠点館で協会加盟館のオリジナルグッズなどをもらうことができます。また、スタンプラリーに参加する54館のすべてのスタンプを集めた方には申請により認定証が発行されます。スタンプラリーは年度をまたいで行うため、多くの方の参加を期待しています。

「たかめる」部会平成27年度事業報告

「たかめる」部会　部会長　正村美里

「たかめる」部会では、職員の資質向上、文化財レスキュー・ネットワークの構築、関係機関との連携を基本方針とし、５回の部会とエリア別の連絡会議を行いながら、これまでに以下の事業を行った。

１．災害時の文化財レスキューについて

初めに、加盟館にレスキューについてのアンケートを行い、各館の意識調査を行った。

部会では、当面「ミュージアム･レスキュー」に焦点をあてて活動を行うこととし、他県調査や講師を呼んで勉強会を開催した。

平成27年９月24日、研修委員会と合同で、和歌山県立近代美術館副館長浜田拓志氏に、和歌山県の文化財レスキューについて講演をいただいた。10月17日、神奈川県立歴史博物館にて神奈川県博物館協会レスキューについての聞き取り調査を、12月９日には、横須賀市自然･人文博物館で行われた神奈川県博物館協会防災訓練に、部会員が参加した。

平成28年３月３日の第３回理事会に、岐阜県博物館協会規約第３条の第７号に「災害時における会員の所蔵資料の救済と情報収集」の１文を追加することを提案、５月28日の平成28年度通常総会の第５号議案において、規約の一部改正が承認された。また、「岐阜県博物館協会ミュージアム・レスキュー活動要項（素案）」を作成、５月28日から29日にかけて行われた岐阜県博物館協会創立50周年記念事業会場で、パネル展示を行った。

２．職員の資質向上、関係機関との連携、館同士のネットワークの強化

「街道」をキーワードに、協会加盟館に連携企画事業への参加を呼びかけた。27年度下半期をかけて各館に告知し、年度末にとりまとめ、A2四つ折りチラシを１万部作成、50周年記念事業で配布した。参加館は53館、うち展示事業は46事業（通年展示を含む）、講座・ワークショップ等は11事業となった。

第90回研修会報告「作品撮影の基礎講座」

期　日：平成28年3月24日（木）
場　所：岐阜県現代陶芸美術館
参加者：36名

講師にフォトグラファーで勝田安彦写真事務所代表・勝田安彦氏をお迎えし、会員自身による撮影技術の向上に加え、カメラマンに撮影を依頼する際、適切な指示が出せるような知識の習得を目指しました。「作品撮影の基礎講座」と題した本研修会は、撮影機材について、光源について、シャッタースピードと絞りについて等といった内容の「基礎編」と、ライティングの違いによる作品の映り方の比較をメインとした「ライティング編」の２本立てで、講義だけでなく、実際に会員によるカメラやストロボの操作なども交えながら学ぶことができました。特に立体物に関する撮影実習では、ライティングの位置や角度などを調整することによって、被写体の質感や存在感が大きく変わってみえることを目の当たりとし、驚きの声が上がる場面もありました。

一口メモ　岐阜県博物館協会スタート時の「学芸員部会」

昭和41年の岐阜県博物館協会設立時、協会の組織の中に「学芸員部会」がありました。学芸員の立場から協会活動をリードする部会でしたが、最初のメンバーは５名でした。

そのころ、大学の学芸員課程は極めて少なく、文部省主催の試験も厳しかったので学芸員も少なかったのです。例えば、昭和39年の学芸員資格取得者は試験合格者14名、無試験合格者（職歴等での取得者）は７名でした。このような状況で、岐阜県博物館協会発足時、会員の中に「学芸員資格」を持つ者は５名しかいなかったのです。しかも１名は愛知県の博物館職員の広瀬鎮氏、２名は小中学校教員で、実際の県内博物館勤務者は２名だけでした。教員籍の２名と広瀬氏は、「個人会員」として協会設立に参加し、学芸員活動に貢献されたのです。

協会発足当時、個人会員の果たした役割は極めて大きかったのです。

地域博物館等活性化支援事業による調査研究報告

関ケ原町玉の火薬庫（旧陸軍火薬庫跡）戦後71年目の真実

（平成28年５月１日～11月末日）

関ケ原町歴史民俗資料館館長　草野道雄

１．開催にあたって

「たまのかやっこ」と地元で呼ばれていた「玉の火薬庫」は、現在の岐阜県不破郡関ケ原町玉地区にありました。正式名称は、「名古屋陸軍兵器補給廠（しょう）関ケ原分廠」で、火薬という言葉はつかわれていません。

大正初期より昭和20年までの約30年間、旧不破郡玉村の一画（周囲６キロ、面積270ha）は火薬庫として使用されていました。現在も、その敷地を囲んだ鉄条網やコンクリート柱が残り、敷地内には、洞窟式倉庫や半洞窟式倉庫がその姿をとどめています。

その１　関ケ原町玉に火薬庫が置かれたのは、気候・地形・位置が適していた。

その２　日本全国を調べ、10年の歳月をかけて、関ケ原町玉に決定した。

その３「乱気流が発生し、攻撃されない。」は、選定理由にはなかった。

その４　アメリカ軍は、終戦まで火薬庫を発見できなかった。

その５　火薬庫の規模は東洋一、敷地面積270ha、４種類の火薬庫があった。

地上清涼倉庫28棟、半洞窟式火薬庫15棟、洞窟式火薬庫５棟、素掘洞窟庫約170個

その６　火薬庫は厳重に監視・警戒されていた。

その７　火薬は東京・板橋と京都・宇治の火薬製造所から関ケ原に集まり、全国の兵器工場に送られた。

その８　火薬には、帯状・棒状で保管されていたものがあった。

歌舞伎衣裳の整理調査報告

美濃歌舞伎博物館・相生座館長　小栗幸江

岐阜県では江戸期より素人芝居が盛んで、全国的に見てもかなり早い時期から衣装屋が生まれた。衣裳は当時の庶民生活では考えられないほど豪華であり、規制の対象ともなりかねないものも多いため、神社の祭礼の御道具として位置付け、上演も祭礼の一部として規制を免れてきた。こうした地域は全国に数カ所見られるが、その衣装群が散逸することなく守られてきた地域は他所に類を見ない。

美濃歌舞伎博物館保管の衣装群は２軒の衣裳屋（瑞浪 - 安藤家・各務原 - 大谷家）の物で、江戸期～昭和期の計4,000点以上である。現在も各地の地芝居で使用されているためその全容を調査することが困難であったが、①衣裳の分類と数量の把握、②衣装の状態の把握、③今後の活用の為の資料作成、を主たる目的として調査を実施した（概要は以下のとおり）。

衣装の種類（仕分け）

衣裳と一口に言っても、10種類ほどに分類できる。実際に衣裳方を担当している筆者の経験をもとに、以下のとおり分類した。

Ｍ－男物・Ｗ－女物・Ｈ－半腰　Ｂ－特殊・Ｔ－袴類・Ｋ－肩衣・Ｙ－四天・ＫＴ－裃・Ｓ－装束・ＳＴ－大紋・Ｕ－打掛・Ｏ－帯類

衣裳の名称（表記）

衣装の特徴の表記は、可能な限り「素材（地色や材質）」・「模様」・「種類」という順にした。

例 - 緋色紗綾型絹地・金繍流れ水に桜文・打掛

衣装の撮影

正・背面、内側、模様（拡大）を撮影した。

一覧表及び情報カードの作成

閲覧が容易な一覧表、衣装の特徴等の情報を記入したカードを作成した。

衣装に施された工夫

早変わりのための「仕掛け」、舞台映えするための「どぶ入」や「刺繍」、「ふき綿」等、歌舞伎の衣裳としての工夫点を記録した。

今後の課題

着丈・袖丈等の詳細なデータの作成、他地区衣裳の調査、保存対策の構築が挙げられるが、後継者育成が一番の急務である。

館・園紹介　No.159・160

熊谷守一つけち記念館

〒508-0351　岐阜県中津川市付知町7713
電話 /0573-83-0055
URL/ http://www.morikazu-museum-tsukechi.jp/

熊谷守一画伯の郷里、中津川市付知町に平成27年９月16日に開館いたしました。110点を超す油彩画を主に、墨彩画、書等の作品、そしてご遺族から寄贈して頂いた多くの遺品等を後世まで生誕地に保存し、熊谷守一の画業を世界に発信していきます。画伯の見た付知の景色を楽しみながら、小さな画面に無限の世界を表現する守一の偉業を心行くまで感じて、至福の時に浸って頂く事が出来ます。

三つの展示室のうち、第一展示室では、付知時代に描かれた「馬」「甥」、東京に戻り描かれた「守一のフォーブ時代」の風景画、人物画。そして日本画を描き、画風が変わり始めた頃の貴重な作品群をご覧いただけます。第二展示室では「守一様式」と言われる独特な画法で描かれた作品群をご覧いただけます。第三展示室は遺品が展示してあります。遺族のご厚意により当館に寄贈された画伯ゆかりの品々を間近にご覧いただけます。

多治見市モザイクタイルミュージアム

〒507-0901　岐阜県多治見市笠原町2082番地5
電話 /0572-43-5101　FAX/0572-43-5114
URL/ http://www.mosaictile-museum.jp/

「多治見市モザイクタイルミュージアム」は、モザイクタイルの生産量が全国１位である多治見市・笠原町の役場跡に平成28年６月４日オープンしました。設計とデザインは世界的に知られる建築家・藤森照信氏で、むくむくと地面から現れたような不思議な外観は、タイルの原料となる粘土が取れる採土場をイメージしています。壁にはタイルと茶碗が埋め込まれ、笠原がもともと茶碗で発展してきた町であるということを表現しました。

４階建の館内にはかつて銭湯や個人宅で使用されていた絵タイルや流し台、浴槽など、地元の有志が約20年かけて収集してきたタイル製品が並んでいます。実際にタイルを製造する際に使用されていた道具や、タイルメーカー・商社が作っていた見本台紙も展示し、タイルがどのように作られてきたか、販売されてきたかを感じていただけるような展示となっています。

談論風発（協会員のリレートーク）

協会員の話題の中からヒントが見えてくる

展示を完成させる要はライティング！ ＬＥＤ照明それぞれの事情

光ミュージアム　吉井隆雄

話題のポケモンＧＯのプレーに当館の駐車場が該当しているせいか、たくさんの人が来場しているが、入館してくれないのが残念である。返って駐車場での事故等が懸念される。この場合、どう対応するかが課題である。

さて、国立西洋美術館がユネスコ世界遺産に登録され嬉しい事である。以前、国立西洋美術館のＬＥＤ照明について発表があった。予算の関係で全部はすぐに交換できないと発表していた。良いと分かっていても、どの美術館も経済的な事情は同じである。

美術館には作品の保存と展示の相反する役割がある。現在、どの美術館もＬＥＤ照明選定等に苦労しているが、ＬＥＤ照明導入は時代の流れであり現段階でこのメーカーが一番良いという事は難しい。しかし、学芸員としては仕様書が作成できるくらいの知識とメーカーや関係者との連携が必要であろう。

ありがたいことにＬＥＤ照明については岐阜県博物館協会の研修会で取り上げていただき参考になった。

当館では平成22年からＬＥＤ照明を一部試験的に導入している。その時点でも、また現在もＬＥＤ照明は研究発展段階である。

半年後には新しいタイプが出ることになることになるだろう。「次世代展示ケース」をはじめ有機ＥＬ、超高透過ガラスなどまだまだ多くの課題はある。あるメーカーの担当者が本格的な有機ＥＬの照明は５年先くらいではないかと言っていたのが印象的だった。選定の基準は、発行方式、色温度、平均演色、調光性能、グレア、付属品の種類やバリエーション、デザイン性、大きさや重さ、扱いやすさ、価格など総体的に考えなくてはならないし、好みもある。そのような中、時間との戦いもあって当館は平成26年の時点でＩＴＬを採用した。今後も他館を参考にするべく岐阜県博物館協会学芸員の皆様のお知恵を拝借したい。

図書紹介

会員のお薦め図書

世界淡水魚園水族館　圓戸 恭子

1「さわって楽しむ博物館」
広瀬浩二郎著（青弓社）

2「骨の学校　ぼくらの骨格標本のつくり方」
盛口満、安田守著（木魂社）

私のお薦めする本を２冊紹介したいと思います。

1　まず１冊目。ご存知の方もいらっしゃるかと思いますが、広瀬浩二郎著「さわって楽しむ博物館」（青弓社）です。子どもたちは（時には大人も）、触るのが大好きです。水族館でアンケートを取ると、いつも要望として上位にあがるのは「生き物に触りたい」ですし、スタッフやボランティアが標本などを見せ、触ってもらうハンズオン展示は大人気です。この本は、学校や博物館、美術館のスタッフが、工夫をこらして触れる展示を考案、実施している様子を紹介しています。視覚障がい者の方向けのもの、子ども向けのものなど、対象もさまざまで、各館において参考となるのではないでしょうか。

2　もう一冊は私の大好きな本、盛口満、安田守著「骨の学校　ぼくらの骨格標本のつくり方」（木魂社）です。理科教員である著者らが、森や道路で見つけた動物の死体を骨格標本にしていく中で、生き物の暮らしや体の形、進化の歴史について解き明かすお話です。骨格標本の作り方についても実際的な手順を載せていますので、標本を手掛けてみたい人への入門書としても適切です。

「骨」というと、自然史系の博物館の範疇というイメージがあるかもしれませんが、その美しいフォルムをモチーフにした美術作品があったり、考古学では動物の骨から人の暮らしを推定したりと、意外と多くの学問分野に登場するものです。また私たち自身の体内にも、等しく骨はあります。よってこちらの本も幅広いジャンルの方に楽しんでいただけるのではないかな、などと思っております。

博物館協会インフォメーション

日本展示学会2016年度研究集会 in 岐阜

日　時：平成28年10月6日(木)13:30～
会　場：多治見市モザイクタイルミュージアム
主　催：日本展示学会・岐阜県博物館協会
参加費：無　料
申込期限：9月25日(日)
申込先：岐阜県博物館協会
研究集会担当　可児光生
［美濃加茂市民ミュージアム］

近年、地域博物館における展示活動では、複数の博物館が連携をとりながら地域の身近な文化資源をさまざまな観点から見つめ直し、領域を超えて総合的・包括的に捉える取り組みが進んでいます。今年の日本展示学会研究集会では、「連携する博物館と展示」をテーマとし、創立50周年を迎えた岐阜県博物館協会との共同開催でこの課題をとりあげて意見交換し交流します。

岐阜県博物館協会 ホームページへの情報掲載のご案内

URL / http://www.gifu-museum.jp

新着情報への掲載依頼は各月20日までに事務局（gpma@mopera.net）までメールにて連絡ください。

【投稿内容】

自館の情報ではなく、博物館学に関する内容など、異種館にも共通する内容とします。例えば、館が行う研修会の他館参加のお誘い情報、博物館等に関する講演会の情報、行事等の運営やマネジメントに関する研修会報告、等々です。

編集後記

今回は、「談論風発」、「図書紹介」、「インフォメーション」等のコーナーを新設しました。協会創立50周年を期に、この機関紙を通して会員同士のつながりが更に強まり、各館の活性化に少しでも寄与できたならとても嬉しいことです。次号も引き続き会員の声を記事にしていきます。皆様からのご意見やご感想をお待ちしています。

発行：岐阜県博物館協会
編集：岐阜県博物館協会　機関紙委員会
〒501-3941 関市小屋名（岐阜県博物館内）
TEL：0575-28-3111